「国語教育研究」第六十四号（令和五年三月刊）

『徒然草』第百十四段における「ケチエン」の漢字表記について

後藤結衣・森双葉
山縣香月

一　目的

『徒然草』第百四十四段は以下の通りである。

栂尾の上人、道を過(ぎ)給(ひ)けるに、河にて馬洗ふをのこ、「あし〳〵」といひければ、上人立(ち)とまりて、「あなたふとや。宿執開發の人かな。阿字々々と唱(ふ)るぞや。如何なる人の御馬ぞ、あまりにたふとく覺ゆるは」と尋(ね)給(ひ)ければ、「府生殿の御馬に候」と答(へ)けり。「こはめでたき事かな。阿字本不生にこそあなれ。嬉しき結縁をもしつるかな」とて、感涙を拭はれけるとぞ。

（日本古典文學大系三〇『方丈記　徒然草』二一二頁。傍線は引用者）

この段は、諸本において「ケチエン」の表記に異同が見られる。「静嘉堂文庫蔵正徹筆」（以下、「正徹本」）では「掲焉」、「陽明叢書」（以下、「陽明本」）では「揚焉　結縁」、「徒然草烏丸本」（以下、「烏丸本」）では「結縁」と表記されている。

『日本国語大辞典』では「掲焉」は著しく際立っているといった意、「結縁」は文字通り縁を結ぶ意で認識されており、(注1)意味の類同は見出し難い。

本稿では、「ケチエン」の漢字表記にこのような異同が見られる理由を明らかにしたい。(注2)本稿の目的は、以下の二点である。

一、『徒然草』第百十四段の「結縁」が「掲焉」とされる本文が存する理由を明らかにすること。

二、正徹本に「掲焉」が用いられている理由について検討すること。

二　研究方法

それぞれの文献の中で「掲焉」「結縁」がどのような意味で使われているかを確認する。

調査するにあたってコーパスアプリケーション中納言日本語歴史

コーパス、ジャパンナレッジを用い、各文献内で「揭焉」「結縁」の用例を集めた。加えて、明治時代以降の文献での使用例を集めるため青空文庫の全文検索システム「ひまわり」を使用した。

三　調査結果

調査結果は以下の通りである。

結果①「揭焉」の共起語

［著しいという意味の「揭焉」］

A　翁ノ云ク、「汝ヂ吉ク聞ケ。此所ハ霊験揭焉ナラム事、他ノ山ニ勝レタリ。我レハ此山ノ鎮守トシテ、貴布禰ノ明神ト云フ。（中略）」。如此ク教テ去ヌ、ト見テ夢覚ヌ。

（新編日本古典文学全集三五『今昔物語集一』一四五～六頁より直接引用）

［縁を結ぶとも取れる「揭焉」］

B　されバ末代ともいふべからず。辺国ともあざむくべからず。至誠の信心もしまことあらば。揭焉の利生あに疑あらんや。不信不法の心を提て大聖大悲の誓をうたがふことなかれとなり。

（ジャパンナレッジ『続群書類従』第二八輯上釈家部「石山寺石記」五六九頁より直接引用）

用例を確認すると、著しいという意味の「揭焉」、縁を結ぶという意味の「揭焉」どちらとも多くの用例で仏教に関する意味を持つ「利生」、「霊験」と共に用いられていた。

結果②「揭焉」の意味

C　これによりて貴賤掌を合せ。緇素踵を継て利生揭焉の砌なり。本尊薬師如来の来由粗これを瓢録す。

（ジャパンナレッジ『続群書類従』第二八輯上釈家部「桑実寺縁起」一二九頁より直接引用）

D　凡我朝は神国として宗廟社稷三千余座。各記現まち々々利益とり々々なれども。かゝる不思議どもいまだ見も聞もをよばず。まことにこれ勁松は霜の後にあらはれ。忠臣は国のあやうきに見る事なれば。時末代に属し人諂曲なるによりて。不信の衆生のために揭焉の化儀をしめし給なるべし。つら々々事の心を案ずるに。釈尊の一代すでにすぎて慈氏の三会またはるかなれば。前仏後仏の中間にむまるるもの。今世後世の利益をうしなはん事をあはれみて。

（ジャパンナレッジ『群書類従』第二輯神祇部巻十六「春日権現験記」六二頁より直接引用）

名詞形で用いられている「揭焉」にのみ「結縁」の意味が見られた。

結果③「揭焉」の意味の変遷

E　彼僧正御先達として被参けるに。当寺の僧徒ども土前御所に参集して御先達に付て奏状を奉る。即院宣を被下俤。永為一院、

御祈願所、可修毎日三時行法者。僧正往事の因縁を思。利生の掲焉を報ぜんがため執奏の力なり。遂園城寺の長吏に補て寺務年久しく。行年七十五にて入滅せられけり。

（ジャパンナレッジ『続群書類従』第二十八輯上釈家部「粉河寺縁起」三二〇頁より直接引用）

F　軍果て、猶以掲焉は、双方より郡村奉行、夫、あらしこを支配する小人頭、道造のクロ鍬之頭、組を引連、夜中篝を焼て互に引を立合て

（「日本国語大辞典」より直接引用）

縁を結ぶという意味の「掲焉」の最も古い例は平安時代の『粉河寺縁起』（用例E）、最も新しい例は江戸時代の『武家名目抄』（用例F）に見られた。

ここで、当時の「掲焉」の語の意味を『時代別国語辞典　室町時代編室町時代編2　か～こ』で参照した。

（前略）【参考】「かつえん」と訓じた例は、三国伝記に「中有毘盧遮那像霊験掲焉」（十二）とある。また、同書には、「結縁」の意で「掲焉」を用いている例も見られる。「サテ善光寺如来化長谷山円通掲霊場事顕示給ヘルナルベシ」（五）。同様な例は、三河物語にも見られる。「左様ニモ御座候ハバ、ソレニハ御座候エ供、御掲焉思食テ内前様御立被成候」（一）

このように、「掲焉」の用字、訓は、「結縁」と互いに通じあうところがあったようである。

辞書に挙げられている『三国伝記』『三河物語』の該当部分の意味を確認することとする。『三国伝記』の該当箇所は以下のものである。

三国伝記第五　　沙門玄棟撰

第三十　信州更級郡白介翁事　明二新長谷寺縁起一ヲ也。（中略）サテハ善光寺ノ如来化シテ長谷山ニ円通掲焉ノ霊場タル事ヲ顕示シ給ヘルナルベシトテ、白介ノ翁彼ノ説法ノ詞ニ随テ当山ニ入ニ、其ノ時ハ宝石モ末レタ顕前ナレバ、堂舎モ無ク本尊モナシ。

（中世の文学『三国伝記（上）』より直接引用）

※補足

○円通は円通大士という注が付けられていた。

【円通大士】

仏語。円満融通の菩薩の意で、観世音菩薩の異称。「首楞厳経」の説によっていわれる。えんつう。

（日本国語大辞典より直接引用）

○霊場は霊地という注が付けられていた。

【霊地】

神仏の霊験あらたかな地。神仏をまつってある神聖な地。また、神社や寺など。霊域。霊場。霊境。霊区。

（日本国語大辞典より直接引用）

『中世の文学 三国伝記（上）』では、時代別国語大辞典の記載とは異なり「掲焉」に著しいと注をつけていた。しかし、ここでは著しいという訳し方だけではなく、「観世音菩薩と縁を結ぶ霊験あらたかな地」と訳すことが出来ると考えた。

また、この段は孝養の心が深い白介の翁のもとを阿弥陀如来が僧に化けて訪れ、宿願を成就するための手助けをするというような仏道に関わる説話の中で登場する語彙である。これは「結縁」の意味である「仏・菩薩が世の人を救うために手をさしのべて縁を結ぶこと」に通じると考えた。

次に、『三河物語』の該当箇所は以下のものである。

三河物語第一　大久保彦左衛門忠教

重々（カサネ〳〵）、御夫（ツカイ）［・使カ］ヲリ申（す）間敷ト申サバ社（コソ）、畏（カシコマッテ）御座候と申上（げ）候処ヱ［へ］、か［欺］様之儀迷惑（メイワク）仕（リ）候。［・使カ］ヲリ申（す）間敷ト申サバ社（コソ）、畏（カシコマッテ）御座候と申上（げ）候処ヱ［へ］、か［欺］様之儀迷惑（メイワク）仕（リ）候。然（れ）共、上之御目之御前、又ハ、所［諸］傍輩（ハウバイ）之ヲモワク［思惑］、か様に御夫ヲ頻請（シキツテウケ）頻請（シキツテウケ）申（す）。一人罷（り）立（つ）も、ウシロ［後］モサビ敷［寂］（く）存知候ヱテ赤面（セキメン）仕（る）。左様にも御座候ハヾ、ヲソレ［恐］ニハ御座候ヱ供、御掲焉（ケチエン）［結縁］（ヲホンメサレ）思食て内前様も御立被成［立ちなされ］候え。御供申（し）可罷立［まかりたつべし］。

（『原本　三河物語　研究・釈文篇』より直接引用）

自身が仕える内膳の桟敷に座っていた家来に対して、使いの者が立ち上がるように呼びかける場面である。家来は「御掲焉を考えて、内膳様もともにお立ちください」と述べているが、ここで「著しい」という意の「掲焉」が用いられているのは確かに違和感がある。「私の立場や（主人と家臣であるという）関係性を考えて、どうかお立ちください」というのであれば多少意味は通るようにも感じられる。

以上のように、『時代別国語辞典　室町時代編室町時代編２　か～こ』で挙げられていた『三国伝記』『三河物語』の例を確認すると、名詞として「掲焉」が使われる場合において、「縁を結ぶ」や「関係性」というように「結縁」に近い意味で使われていたことがわかる。このことは、本調査結果とも合致する。

四　考察

調査結果をもとに、「掲焉」の語意の変化とその原因、正徹がこの場面で「掲焉」を用いた意図という観点で考察を行った。

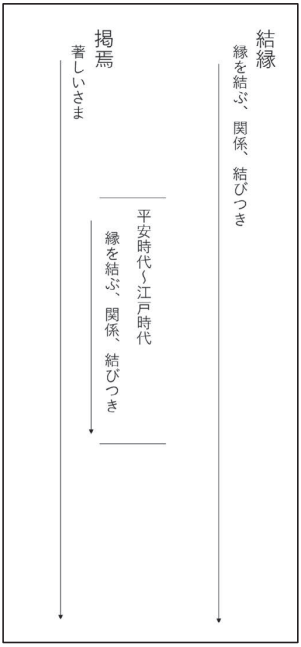
Ⅰ　本文の異同が生じた理由

原因①「掲焉」の語意の変化によるもの

用例はあまり多くはないが「掲焉」には著しいという意味に加えて、ご縁を結ぶ、関係性、結びつきというような意味で使われていたことが分かった。正徹本の該当箇所で「掲焉」が使われたのは誤

写とは言い切れない。該当箇所で「結縁」ではなく「掲焉」が使われた意図や妥当性については後述する。

「掲焉」と「結縁」の関係性について、今回の調査結果から、もともとあった「掲焉」の語の意味に「結縁」の意味が一方的に加わったものであると考えられる。左は「掲焉」と「結縁」の語の使われ方のイメージ図である。



では、なぜこのような語の意味変化が生じたのだろうか。

原因②使用場面・方法によるもの

「掲焉」の主な意味は「著しい、際立った」というものであり、加えて、先述したように仏教に関する意味を持つ語と共に使用されることが多く、ほとんどは「(仏や菩薩が与える恵みが)著しい」という使われ方であった。また、「結縁」は「仏道と縁を結ぶこと」「仏・菩薩が世の人を救うために手をさしのべて縁を結ぶこと」という意味である。このことから、「掲焉」の意味が「(仏や菩薩とご縁を結びそのことよって得られる恵みが)著しい」というように次第に変化し、そこから更に「縁を結ぶ」「関係性」というような意味を持つようになるというように「掲焉」が内包する意味の範囲が広がった可能性がある。

原因③「著しい」の意味によるもの

先述したように、「掲焉」は主に「著しい、際立った」という意味である。これは、現代で言う「すごい」のように、どのような文脈で使われてもさほど違和感がない意味である。調査した文献内でも著しいとも縁を結ぶとも取れる例があった。このことから、「掲焉」は一般的な単語に比べ他の単語の意味を含みやすく、その意味に曖昧性があった可能性がある。

原因②、③を図にまとめると以下のようになる。

「掲焉」著しい
← 原因②「利生」「霊験」と共に用いられる
原因③「掲焉」は他の語の意味を含みやすい
(仏や菩薩による恵みが(利生・霊験))著しい
← 仏や菩薩による恵みは「結縁」によって得られる。
＋原因③「掲焉」は他の語の意味を含みやすい
(仏や菩薩とご縁(結縁)を結ぶこと・仏道と縁(縁)を結ぶこと)により得られる恵みが)著しい
←
著しいに加えて縁を結ぶ、関係性、結びなど…

Ⅱ　正徹が「掲焉」を用いた理由

ここまでの検討から、正徹本が成立した鎌倉時代末期は「掲焉」「結縁」の両者とも「縁を結ぶ」という意を含んでいたことになる。「掲焉」が「縁を結ぶ、関係を持つ」という意味を持っていた時代があった可能性を示してきた。この可能性を踏まえると、当時の用例数は「縁を結ぶ」という意で用いられているのは圧倒的に「結縁」が多く、『徒然草』第百四十四段で正徹が「掲焉」の字を用いたのには何らかの意図があると考えるのが自然ではないだろうか。(注3) また、正徹本系統以外の諸本（細川本、龍谷大学本、萬治二年刊本、常縁本系統の卜部家本、常縁本、烏丸本系統の烏丸本、室町期写流布本）では当該部分で「結縁」（卜部家本では「けつえむ」）と書かれていた。加えて、同じ正徹本系統の陽明文庫本、藍表紙本でも「結縁」と書かれていた。

『徒然草』第百四十四段の当該部分では、馬を洗っている男が「足足」と言ったのを上人は「阿字阿字」と言ったり、男が「府生殿」と言ったのを「本不生」と言ったりしている。このことから、男の発言とそれを受けた上人の理解・男への返しの発言に差異があることがわかる。ここから推測できることは、本来縁を結ぶ意を示す際は「結縁」が主流ではあったが、言葉の言い換え表現として敢えて「掲焉」が選ばれたのではないかということだ。当該段において特徴的な、言葉の聞き違え、または仏教的な意味の結びつけのおもしろさをより強調するために、当時多く用いられていた「結縁」ではなく、縁を結ぶ意で用いられる例がわずかであり、また仏教的な言葉とともに用いられることの多かった「掲焉」の字を当てたのではないかと考える。

仮に上人の認識の違いが単なる聞き間違いであったならば、縁を結ぶ意に、主流である結縁ではなく掲焉の字を当てることで上人の間違いに注目させ、ある種の滑稽さを演出することができる。また、上人の認識が男の言葉を仏教的な考えに意図的に結びつけようとしているのならば、仏道的な文脈で用いられることの多い「掲焉」を当てることで、その尊さを際立たせる効果もあるだろう。「掲焉」が選ばれた理由として、言葉の言い換えを強調するためという説を挙げる。

五　むすび

以上の考察を整理する。

五―一「結縁」と「掲焉」の異同の理由

・「掲焉」は仏教に関する意味の単語とともに用いられていることが多い。

・「結縁」の意味は名詞形で用いられている「掲焉」に見られることがあった。

・「縁を結ぶ」という意味の「掲焉」は調査した結果、最も古い例は平安時代の『粉河寺縁起』に、最も新しい例は江戸時代の『武家名目抄』に見られたため、「結縁」の意味を併せ持っていたのは平安時代～江戸時代であり、現代に至る過程で何らかの理由で「結縁」と「掲焉」は意味が分離したと考える。

また、「掲焉」の語彙の変化とその原因については以下の可能性が考えられる。(注4)

・「掲焉」は「著しい」という意味を持ち、現代の「すごい」のように多くの文脈で用いやすい語である。したがって、他の語の意味を含みやすく、その意味に曖昧性があったため、「掲焉」の意味に「結縁」の意味が加わるという語彙の変化が起きたことが考えられる。

・「掲焉」は仏教に関する語と使用されることが多く、また、「結縁」は「仏道と縁を結ぶこと」「仏・菩薩が世の人を救うために手をさしのべて縁を結ぶこと」という意味である。二語が同じ音をもつこと、前述したように「掲焉」が他の語の意味を含みやすいという特徴を踏まえると、「掲焉」の意味が「(仏や菩薩とご縁を結びそのことよって得られる恵みが)著しい」というように変化し、そこから更に「縁を結ぶ」「関係性」というような意味を持つようになるというように「掲焉」が内包する意味の範囲が広がった可能性があると考えた。

五―二　正徹本に「掲焉」が用いられている理由

・「掲焉」が「結縁」(縁を結ぶ)という意味をもっていたこと、正徹が原文に対して忠実な態度で書写していたこと、下巻に関しては他本と校合したにも関わらず「掲焉」という語に修正を加えなかったことを踏まえると、誤写の可能性は低いと考える。

・当該段では馬を洗っている男が「足足」と言ったのを上人は「阿字阿字」と言ったり、男が「府生殿」と言ったのを「本不生」と言ったりするなど聞き間違いの場面が多く見られる。いずれも、普通の言葉が仏教語として間違えられているのが特徴である。「掲焉」においても、言葉の聞き違えまたは仏教的な意味の結びつけのおもしろさをより強調するためにあえて「掲焉」が用いられたのではないかと考える。

注

(1)『日本国語大辞典』によると、「掲焉」は(1)著しいさま。きわだっているさま。目だつさま。また、きっぱりとしたさま。けつえん。(2)高くあがるさま。高くそびえるさま。けつえん。の意である。対して「結縁」は(1)仏語。仏道に縁を結ぶこと。未来に成仏する機縁を作ること。また、そのために写経や法会を営むこと。(2)大事なもの、貴重な文物に接する機会を得ること。(3)事件などに関係すること。連座すること。(4)親戚になること。縁者となること。とされている。現在通ずる辞書を参照してみると、両者の語意に差があることは明らかである。

(2)　陽明本ではミセケチが付される前に「揚焉」の字が当てられているが、運歩色葉集〔一五四八〕において「揚焉」に「イチシロシ」という読みが付されている用例がある。陽明本に始め「揚焉」が記されているのは、「揚焉」「掲焉」の字形や語意の類似による誤写であると思われるため、本稿では詳しく追求しない。

(3)　正徹が「掲焉」を用いた理由として、単なる誤写の可能性も

考えたが、以下の理由から誤写の可能性は低いのではないかと思われる。

『正徹の研究　中世歌人研究』においては静嘉堂文庫蔵「徒然草」について、「その筆跡は、正徹自筆とみなしてよく、相当丁寧に書写している。」という記述があり、正徹の丁寧な書写の姿勢を示している。また、『徒然草〈下〉静嘉堂文庫蔵正徹筆』の書誌においても、当字は当時使用されていた字であり、正徹は親本の当字をそのまま用いたとされている。この記述からも正徹の正確な書写の取り組みを窺い知ることができる。

このように、かなり丁寧なものであったとされる正徹の書写の段階で、前述のような誤写が起こった可能性は低いのではないだろうか。

さらに、正徹本の奥書には以下のように記されている。

〈上巻〉

此草子一見之次不堪感餘去
永享元年十二月比書写置
處或仁所望之間重而書写以初
本令与進了雖不審多如写本
書之而已

〈下巻〉

此草子一見之次不堪感餘去
永享元年冬十二月中旬比書写
畢即両三本之取合校以直付畢
雖然尚以非無不審也初書写之
本或仁依所望与進重書写所也
後日以能書誂清書者也

上巻においては、書写した本には不審な点が多かったが、そのまま書写したという旨の記述がある。私意を加えて書き換えることを積極的にはしておらず、忠実な態度をとっていたと思われる。また下巻については三巻の諸本を参照して訂正を加えたということであるが、「掲焉」の部分には特に修正が加えられていない。正徹が「掲焉」を誤った用法であるとは考えておらず、誤写であったとしても、それに気づかなかったとも考え難いだろう。

もちろん正徹が誤写した可能性も完全には否定できないが、「掲焉」に縁を結ぶという意味があったこと、正徹が原文に忠実な態度で書写をしていたこと、下巻に関しては他本と校合したにも関わらず修正を加えていないことから考えると、単なる書き間違いの可能性は低いのではないだろうか。論者としては正徹本で「掲焉」の字が写されているのには何らかの意味があるという立場をとった。

（4）「掲焉」「結縁」の違いと使用の変遷について調査してきたが、「結縁」と「掲焉」の用例の調査で全体的に用例数が少ないこと、調査対象とした文献はその内訳に偏りがあるため、文脈から帰納した二語の意味に偏りが生まれている可能性があることが課題として挙げられる。

付記

本論文は二〇二二年度「古代国語文化演習A」の演習発表で作成した資料をもとに論文化したものである。論文化にあたって佐々木勇先生にご指導いただいた。

（広島大学教育学部三年）